

システム更新の思い出

有澤 健治(経営学部)

私が愛知大学に経営学部教員として赴任したのは、名古屋校舎(三好校舎)ができる2年前だったと思う。三好校舎開設に伴って、情報系に強い教員が求められた結果らしい。そして、直ちに大きな仕事を牽引しなければならなくなった。

私は 1987年4月から2000年9月まで、愛知大学の第1期から第5期までの情報システムに何らかの形で係わって来たが、特に以下の3つとの関わりが深い。

(1) 第1期(1988年)

コンピュータの利用形態が大型汎用機からパソコンに移行しつつある時期

(2) 第3期(1994年)

インターネットが注目されつつある時期

(3) 第5期(2000年)

パソコン環境の成熟期

情報システムのデザインは業者が行うが、その元となるシステムコンセプトは大学が決める必要がある。そのためには将来を見通す必要があるが、それ自体が困難だけでなく、さらに周りを説得する必要がある。愛知大学は愛知県の私学の中では最も早く学内LANを整備した大学であり、新聞にも大きく報道されたことがある。しかし、LANを導入するために、インターネットとは何かを知らない大多数を相手に、説明の場を設ける等、議論を巻き起こしながら学内のコンセンサスを形成していったのである。

思えば、委員を務めていた10年余は、システム更新が発生するたびに教育ニーズを吟味しながら、時々の技術の成熟度と与えられた予算規模で実現可能なシステムのコンセプトを考えなくてはならなかった。これは結構手間がかかる作業である。3年毎のシステム更新は大学の実情に合わず、私立大学のシステム更新を取り仕切る私情協に4年毎のシステム更新を認めるようお願いした事もある。そして現在は4年毎のシステム更新が認められ、愛知大学は4年毎にシステムを更新している。

最後に、私のわがままを陰で支えてくださった藤田先生に感謝したい。また、SEであった樋口君は実によくやってくれたと思う。私が委員をやっていた時期のセンター委員会は熱気に溢れていた。彼らの全てに感謝したい。